

第七回実心実学読書会

日時：10月30日（土）14：00～17：00（日本時間）

作品：**後藤彰信**『石川三四郎と日本アナーキズム』（同成社、2016）

コメンテーター：**田原正太郎さん**（東北大学大学院、非会員）
李彩花さん（名古屋経済大学）

プログラム

【第一部 90分】

14:00-14:10 後藤さんご紹介、趣旨説明（片岡）

14:10-14:30 参加者自己紹介

14:30-14:50 田原さんコメント

14:50-15:00 後藤さんリプライ

15:00-15:20 李彩花さんコメント

15:20-15:30 後藤さんリプライ

15:30-15:40 休憩

【第二部 80分】

15:40-16:55 参加者との対話

16:55-17:00 閉会あいさつ、次回予告（片岡）

後藤彰信さん紹介

1956年、宮城県生まれ。

1980年、茨城大学人文学部文学科史学専攻卒業。

1982年、早稲田大学大学院文学研究科博士前期課程日本史専攻修了。

郷里の宮城県に戻って県立高校の教員となる。

→『**日本サンジカリズム運動史**』啓衆新社、1984

40歳、現職教員派遣制度で宮城教育大学大学院教育学研究科（社会科教育専修）入学。
本郷隆盛先生の下で学び、二度目の修士論文（「石川三四郎の主観主義」）。

→本書第一章第一節「**石川三四郎の思想形成と伝統思想**」

（初出、松永昌三編『近代日本文化の再発見』岩田書院、2006）

2001年、東北大学大学院博士後期課程に編入学。2007年、単位取得満期退学。

2016年、宮城県公立高校教員を定年退職。

現在、柴田町文化財保護委員。初期社会主義研究会会員。日本思想史学会会員。

鶴見俊輔「石川三四郎」 (1975) 冒頭

白井吉見の『安曇野』（筑摩書房、一九六五―七四年）は、明治三十一年のクリスマスにはじまり昭和戦後の現在に終る、七十年余の期間に、長野県松本市を中心としておりなす人びとの交際をえがいた五部作の歴史小説である。登場人物は何百人にも及び、明治・大正・昭和三代の文学者、芸術家、思想家、教師、新聞記者、政治家、実業家、軍人が実名でえがかれている。大作を書き終えてからの感想を、作者は次のように述べた。

最後に尊敬する石川三四郎について一口申します。石川三四郎は、**人間とは何か**、ということをはっきりした形でつかんでいた人だと思います。人間とは、命を終える瞬間まで、二つの闘いをやりぬく存在である。そういう考えであります。

二つの闘いとは何かというと、一つは、外なる社会の不合理と闘うということ。もう一つは、内なる自分と闘うということ、自分の内なる“無明（むみょう）”と闘うということです。

—**無明**とは、私利、私欲、エゴイズムをはじめ、人生は何のためにあるか、何のために人生を生きるかっていうことにさえ無関心で、考えようともしない愚かな状態を無明って名づけたようであります。—

わけても彼が大事に思ったのは、社会の不合理的と闘うことも大事だが、一層大事なのは、**自分と闘うこと**、自分の内なる無明と闘うこと、これをやり抜くことこそ人間という存在なんだ。臨終の間際まで、この闘いは続けられなければならない。

その意味で、石川三四郎は、**この世の中で一番大事なのは教育**だと、はっきり言っております。それは人から教えられるばかりでなしに、自分が自分と闘うこと、これが彼のいう教育の大部分を占めるわけであります。

何百人という人たちに、『安曇野』には登場してもらいましたが、**一番敬愛する人**は誰かと訊かれれば、石川三四郎をえらびます。石川三四郎こそ、なつかしく、慕わしい人であります。

(臼井吉見「歴史と教育」、『教育の心』毎日新聞社、一九七五年)

拙作「安曇野」には、明治、大正、昭和の三代にわたって、学者、思想家、文学者、美術科、宗教家、政治家、軍人など、何百人とも知れぬ群像が登場する。その中で、一人をえらべといわれれば、僕は躊躇なく、石川三四郎をあげる。石川三四郎こそは、それほど人間的魅力に溢れた、**世界的レベルに於ける、日本独自の思想家**だと思う。 ※『石川三四郎著作集』(青土社、1977~79)の箱の帯に記された臼井吉見の評語。